

航空

海軍航空隊一筋五年半

いまだに続く戦友愛

愛知県 近藤 正寛

私は戦後、現在の愛知県緑区に居住しておりますが、生地は愛媛県宇摩郡土居町、今の新居浜市と三島市との中間の所で、精米業を営む家の次男として、大正十一（一九二二）年三月三十一日に生まれました。兄と妹二人、弟三人の家族で、現在は大家族と思われるかもしれませんが、当時は兄弟の五人や六人はそれほど多いとは言えませんでした。

兄は陸軍へ志願して入り、将来軍人になろうと志し

て朝鮮で勤務しておりました。当時は既に支那事変も始まっており、軍国時代に入っていましたから、男は軍隊に行くのは当然でした。そんな時勢からしていつまでも家業を手伝っているより、私は海軍を志願しようと思いはじめておりました。初めは鉄道員になろうと思ひ受験したのですが、当時は欠員が無くて諦めざるを得なかったのです。

昭和十五（一九四〇）年六月、待望の海軍に志願をし、六月一日、佐世保海兵団に入団が決まりました。

私は航空を志願したのですが、兵籍番号は「佐志空四五七〇番」で、その後整備となったので、兵籍番号は「佐志三六六六番」と変わりました。

佐世保海兵団に入団し第四十六分隊であり、一分隊は陸軍と違い（陸軍は十数人）七十〜八十人ぐらいで

あったと思います。志願兵は四個分隊でした。海軍志願に対して父母は、長兄が陸軍志願をしたので、おそらく次男である私に家業を継がせたい心づもりであったと思うし、戦争もだんだん激しくなっていましたから、子供の死とか負傷に対する不安がなかったとは嘘であり、当然の心情であつたろうと、戦後、自分が親となつてはじめて思つた次第です。

海兵団に入団し、はじめは基礎教育です。海兵団の教育は厳しいと聞いていましたが、個人に対して、特に私は個人的な制裁はほとんどありませんでした。しかし、団体対団体の対抗というか、競争意識は強く、他の分隊に負けると食事を抜かれることもありました。カッター、棒倒し、相撲等です。

基本的な軍事教育は、陸戦では、三八式歩兵銃や拳銃の射撃訓練もあり、戦闘訓練は陸軍とほとんど同じであつたようでした。我々航空でも機関科でも陸戦をやりました。六カ月の教育は、陸軍流に言えば、一期、二期を合わせた期間に相当しています。これで基

礎教育は終わり、初年兵教育の仕上げは、相の浦での総合演習です。

十月末卒業をした私は、台湾東港の航空隊に入隊しました。東港では、九七式飛行艇（大型で発動機四）の訓練です。燃料のガソリンはドラム缶六十本分を手動で入れるので、これは、今の給油と違い大変な労働です。それからエンジン関係の分解や学科の勉強、訓練でした。

実施部隊であるので、十二月頃からは雷撃の訓練です。飛行艇の腹の下に魚雷をつけるのですが、一本約一トンの重量があります。直径四十五センチ、長さ五メートル二十七だと記憶しています。そんな大きな魚雷ですから一発しか持つて行けません。

魚雷の前部には火薬三百キログラム、次の部位に圧搾空気、火薬部の上に爆発弁、中央の上部に発動管、発動管を自己動力で抜くと空気弁が稼働して百八十キロの空気が出る。その後二〇〇メートル走ると安全装置が解け火薬が爆発し目的地を破壊する。魚雷を投下すると自動的に二〇〇メートル走る。演習の時は、そ

の泡になった雷跡を追って写真をとるのです。それを我々は見学しました。飛行艇は雷撃のほかは、哨戒が主でした。

私はその後、横浜の海岸の杉田の航空隊へ飛行艇製作した川西の工場もあった)で訓練や補修を行ったのですが、杉田は訓練、補修の基地であり、当時の飛行艇の基地は指宿と佐世保でした。

その後、私は土浦航空隊に行き、丙種の第七期生として三カ月間訓練をしました。予科練には、乙種(十四歳くらいから三年間基礎訓練をする)甲種(飛行予科は中学三年から)と丙種の三種あったのでした。私は、霞ヶ浦で、模型飛行機(油圧で動くもの)の練習をしました。九〇式練習機で適性も見るのでした。

二カ月後には、台湾の東港に帰り、次に横須賀へ行き、航空兵器雷爆専修第十八期生として教育を五カ月受けたのでした。続いて、普通科練習生を卒業し、マーシャル群島のタラワ島の第七五二航空隊(一式陸攻)に勤務しました。

次に、ウエキ島陥落後、爆弾の整理をしました。占

領の後いろいろの物が散乱していたり、遺留品があったり、それを整理した後、十日間いました。捕虜を駆逐艦で内地へ連れて行きましたが、その間は整理の手伝いをさせました。食事も一緒にしていました。敵も味方もない、捕虜でも我々と同じようにしていました。

昭和十七年十二月、木更津へ来ましたら、第七五二航空隊が引き揚げてきました。隊はその後、木更津航空隊になり、一式陸攻「銀河」の基地でした。

その後、豊後水道で旧戦艦「摂津」の甲板はコンクリートで固めてある標的艦となり、その「摂津」に対し、雷撃の訓練を続けました。その後は、木更津―三沢と移り、千島列島の幌筵島へ移りました。

米軍の夜間爆撃が盛んになってきましたが、照明弾を投弾すると明るさは何万燭光もあり昼のようになりました。それで米軍は観測していたのでした。幌筵島には、アッツ島玉砕、キスカ島無血撤退作戦のための援護であったのです。従って、米軍の攻撃も熾烈を極め、我々航空隊のみならず、地上部隊にも犠牲が出るのは当然でした。敵は日本軍を封じ込めて、アッツ上

陸、そしてキスカ攻撃でしたから。

千島は、四、五月というのにまだ残雪がありました。その後、私は横須賀の航空兵器雷撃専修の第二十期生となり、雷撃の専門教育を受けました。横須賀卒業の時は、対岸の洲の崎航空隊は横須賀分遣隊に変わっていました。

次に今度は大分航空隊でしたが、昭和十九年二月三月には、第七百五十二航空へ戻りました。魚雷の調整もし、分解して調整する仕事もしました。太刀洗の陸軍の「キ六七」「隼」に雷撃訓練を別府湾でしました。魚雷は大分のを使得てでした。その頃、山田五十鈴などの有名な俳優が慰問に来て、格納庫で撮影をしたのを覚えています。今度は、台湾へ戻るのではなく、九州の出水航空隊へ転属となりました。

昭和二十年一月一式陸攻の部隊の鹿屋へ転属となり、三角兵舎に分散し、トラックで飛行場まで行き、爆撃・爆雷装をしました。夜間に呼び出されて作業をするなど、戦局が慌ただしくなってきました。その頃になると、米軍機が昼間、八〇〇一〇〇機も来襲する

ようになり、我々は空襲状況を防空壕から覗いていました。蛸壺に居た佐伯分隊士がやられてから、三角兵舎に帰りました。

二月、横須賀の田浦航空隊に転属し、新たに部隊編成をして、仲間四人とその部隊へ行きました。私は四国の新しい香川県観音寺基地へ先発しました。そのため呉海軍工廠へ出張し、主計長と一緒に、新しい部隊に支給するため蚊帳や毛布を機帆船から岸壁へ落としましたが、その日は昭和二十年八月十四日でした。

終戦を知ったので、航空隊の若い兵隊達には、帰る所をメモさせて帰郷させました。我々は、天皇陛下の玉音放送を聞いたのですが、雑音が多くて良く聞き取れませんでした。「無条件降伏」であることが判りましたので、各班の人員を調べた後、私の家は観音寺から列車で四〇五の駅の所でしてから家に帰りました。

その後、役場から「残務整理あり」との連絡があり観音寺町のお寺と、大國屋という料理屋を借り切って、そこで残務整理をしました。毛布・蚊帳・寝台な

どは各学校や団体へ無償で渡しました。しかし、個人には渡しませんでした。トラックは、残務整理に協力した者に渡しました。

今にして思いますと、海軍の教育は良かった。在隊中のことですが、別れるとき、どこかへ行く時も、転勤する時も、「帽振れ」と号令して皆で見送ったもので、良い思い出です。教育中のバッタ（堅い棒で尻を叩く）を私は一度だけしか食わなかったのですが、団体としてはやられました。

また、人間関係も良く、恩給の申請の時の証明者として心良く引き受けてくれた戦友もあったし、出水航空隊の時は近くにある航空廠から食糧など差し入れてもらい、随分助かった思い出もあります。同じ海軍の仲間同士ということなのです。

私は復員後、就職先も少なく、志願兵ですので入隊前はどこへも勤めておらず、悩んでいましたが、軍人であったため、住友化学工業の保安課に入りました。その後、塩化ビニールの製造の部門にかりました。

同じ航空隊で同じ釜の飯を食べた仲間が、五十余年

経過した今日まで交友が続いていることは、戦友愛のお陰であると今も思っています。

生死一如 — 特別攻撃隊戦記(三) —

茨城県 長 沼 武 治

沖繩特攻

昭和二十(一九四五)年五月二十三日、最後の外出は正規の時間に帰隊した。ここに至っては何もすることはなく、防空壕内でペアの連中とトランプに興じていた。遺書も書いた。幸い桜井中尉が土浦の出身で要務士官だったので遺書の投函をお願いした。色々長い文句の手紙を書いた。二十四日の外出は許されなかった。

「明朝〇五〇〇、準備の出来た者から発進せよ。出撃員の身の回りは残った者が面倒を見よ」との連絡があった。当たり前だ、明日から神様になるのではないか、と思いつながらその連絡を聞いていた。夜はいつも